

今の学生を見て思うこと

北本 卓也

山口大学

「数式処理ソフトウェア」の Mathematica が販売開始されたのは、筆者が学生の時でした。当時、大学生だった筆者にとっては、Mathematica は結構衝撃的で、なんでも計算できる魔法の道具のように感じられました（もちろん、今ではできないことがたくさんあることは承知してはいますが）。それからかなりの時間が経ち、Mathematica や Maple の日本での知名度も上がってきたように思っていたのですが、筆者が所属している学部 of 学生に尋ねると、「Mathematica や Maple の名前を聞いたことがない」という学生が案外多くいます。大学受験の受験勉強に、数式処理ソフトウェアが必ずしも役に立つとは限らないため、高校生の時にこれらの数式処理ソフトウェアに触れ合う機会が少ないことは承知してはいますが、彼らが既に大学生になっていることや、数学の教員を目指す学生が多い（筆者は教育学部に所属しています）事を考えると、もう少し数式処理のことを知っている学生が多くてもいいのではないかという気がします。特に現在では、Maxima などのフリーの数式処理ソフトウェアもあります。大学で教える数学の計算問題などは、これらの数式処理ソフトウェアでそのまま解けるものも多いので、これらのソフトウェアをもっと活用すれば良いのにといい思いを持っています。

この状況の原因の一つは、うちの学部における私の数式処理の宣伝不足であると思いますが、他の原因として、一般社会において数式処理が今ひとつ広まっていないということも挙げられるのではないのでしょうか。数式処理を知っている人は知っているが、知らない人は全く知らないという二極化の状況が起きている気がします。

今の学生を見ると、数式処理をあまり知らないというのは先述した通りですが、別に IT 技術を使えないというわけではありません（むしろ彼らは IT 技術には慣れてしています）。近年、インターネットの普及に伴い、様々な IT 技術が開発され、それに合わせてスマートフォンやタブレット端末などが流行ってきています。今の学生は、これらの IT 技術を使ったサービスを使うことには積極的ですが、これらの技術を使って新しい物を作り上げることには消極的である傾向が伺えます。彼らにしてみれば、様々なサービスが既にあるので、自分で何かを作らなくても既にあるものから自分にあったものを選択すれば良いということなのでしょう。パソコンよりも、タブレット端末が流行ってきているのもその傾向の一つのあらわれなのかもしれません（タブレット端末は自分で何かを作成することには向きません）。

このように、IT 技術のサービスを消費することに慣れている学生達に数式処理の事を知ってもらうためには、「数式処理で何ができるかを説明する」ことや「IT 技術を使ったサービスのうち、数式処理を使っているものを紹介する」ことが効果的であると考え、学生への働きかけを行っています。個人的にはもう少し、学生自らが数式処理などの IT 技術の活用に積極的になって欲しいと思っていますが、まず数式処理を使うことのメリットを示して、興味や関心をひき、数式処理を「全く知らない人」から「少しは知っている人」または「知らないが興味のある人」になってもらおうとしている所です（もちろん、「少しは知っている人」になってもらった後は、「よく知っている人」になってもらい、数式処理を広めて行って欲しいと思っていますが...）。

今の学生は私が大学生であった時に比べて、IT 技術（数式処理も含めたいろいろな意味で）に恵まれていますから、それらを活用しないとったいなと私は常々思っているのですが、なかなかそれが学生に伝わらず、もどかしい思いをしているところです。